



食を通して健全な心身を

食育という言葉が浸透し、食の安心や安全が求められる時代になつてきています。食育＝食を通して人間として生きる力を育む。法律で食育基本法が定められたことにより、健康的な食のあり方を考えることに関心が高まっています。ファストフードや大量生産の安い作物などが主流となつていくなか、ふるさと21の生産者さんは手間暇を惜しまず、安心安全な農産物を届けたいという思いで日々励まれています。ふるさと21株式会社はこのような生産者の思いを大切に、一人でも多くの方に無農薬・無化学肥料栽培の素晴らしさを拡大していきたいと思っています。

ふるさと21株式会社 工藤由美

「ファームレター」Vol.15  
2017年8月25日号（毎月発行）  
発行／一般社団法人 自然食ねっと  
デザイン／株式会社サンカ  
文・編集／石川千晶 写真／浦岡伸行



よしむら農園の情報を映像でご覧いただけます。



一般社団法人

自然食ねっと

有機農業の継承と拡大に向けて農業者が主体となり、消費者や企業のみならず有機農作物・加工品を身近に感じていただけるような活動や情報提供を行うことを目的としています。

〒250-0024 神奈川県小田原市根府川 549-3 TEL.0120-07-8313

◎自然食ねっと参加生産者の作物を産地直送



ふるさと21 www.fsec.jp

ふるさと21

検索

\*よしむら農園の商品は上記サイトでご購入いただけます。

Yoshimura Farm

# よしむら農園

土と創る 若狭コシヒカリ(米)

## 日本の原風景が残る 里山を次世代に。 吉村義彦の楽しみ



### 環境に優しい農業を夫婦で実践

豊かな大地と清らかな水に恵まれた福井県は、古来より「越山若水」と呼ばれる食の宝庫。生き物を育む農法など、栽培方法に特色がある福井米は高い品質に定評がある。

その福井県のなかでも、若狭湾国定公園にあり、ラムサール条約に登録された「三方五湖」、全国名水百選「瓜割の滝」など、三十三間山をはじめとする山々を源とする豊富な水を誇る若狭町の相田集落に、よしむら農園はある。

吉村義彦さんは安心安全な食べ物を作りたいという願いから有機農業を始め、全圃場4ヘクタールでコシ

ヒカリ、あきさかり、ミルキークイーンなど、有機JASの米栽培を実現。古代米や福井梅、野菜の栽培も手をつけている。

福井県では今年、「いちほまれ」という新しい品種の米を作ることになり、よしむら農園は有機での試験栽培の認定を受けた。「日本一おいしいお米を全国の皆様にお届けします」と宣誓した掲示板を田んぼの前に掲



げ、「全米史上最高ブランド」のいちほまれを、収穫に向けて大切に育んでいる。

### よしむら農園の商品

[29年度産] 有機JASコシヒカリ 5kg

※価格は時価。商品の詳細は「ふるさと21」サイト(www.fsec.jp)をご覧ください。

よしむら農園 福井県三方上中郡若狭町相田 34-28



\*写真はイメージです。

二十歳頃の青年団活動時、義彦さんは青年団長、妻の春子さんは副団長だったという。





「よしむら農園 吉村義彦さん」

## 美しい自然の循環と共生を願って

田んぼの生き物を守る。

いきものいっぱい田んぼの中で子どもがはしゃぐ田舎のながめぐるりとつながる自然といっしょに人も、お米も、育っています。若狭の空気も一緒に食べよう！

これがよしむら農園のコンセプトで、私の名刺にも印刷しています。田んぼの向こうに山や川が広がり、JR小浜線の1両電車が1時間に1本ほど通るのどかな田園風景はどこか懐かしく、自然を大切に農業を営めることに感謝しています。

国土の約7割を森林が占め、世界でも有数の緑豊かな日本。その環境に農村は貢献しています。水や空気を浄化する田んぼはダムの役割を果たし、多くの生き物の命を育みます。農薬や化学肥料、除草剤を使わなければ川や海の生物も守られます。合鴨農法や有機JAS栽培では、微生物やミミズ、ドジョウ、カエル、鳥など、たくさんの生き物が田んぼに集まり、自然の食物連鎖が行われます。ホタルが住めるこの集落の特性を利用し、多様な生き物や植物が循環と共生のなかで支え合えるような農業をすることに誇りを持っています。

有機農業はレベルが高いと思われがちですが、最もやりやすい農業ではないかと思えます。一番大切なのは太陽です。太陽エネルギーと水と炭酸ガスがあれば、お米はできます。稲と相性の合う生き物の組み合わせを実現できれば、光合成という神秘的な働きを受け、稲がそれに応えてくれます。

田舎の恵みは、みんなの宝物

子どもたちに農業に親しんでもらうため、農業体験を受け入れています。田舎の田んぼの恵みは我々農家だけの宝物ではないと考えているからです。田舎に来ること自体が体験学習です。稲を植える作業だけにこだわらず、川にいるドジョウと遊ぶ楽しみも経験して欲しいと思います。やんちゃな子もいますが、稲刈りの秋に収穫の喜びを分かち合えば、思い出が心に刻まれます。田植えや稲刈り作業後のお食事タイムでは、野の恵み山の恵み湖の恵みを少しずつ食べてもらい、田舎の本当の良さを知ってもらえるように努力しています。

ゲストティーチャーとして学校に話をしに行ったりもします。学校の先生だけでは伝えきれないことも地元の子どもたちにきちんと伝えていかないといけないので、お呼びがかかれば私も家内も喜んでやらせてもらいます。うちの野菜を給食の食材に提供しているの、家内が給食センターに野菜の説明をしに行くこともあります。私たちの想いが伝わったことがわかるような嬉しいお礼の手紙を子どもたちからももらうこともあり、できるだけ一人ずつに返事を書くようにしています。

スローフードで食育の大切さを伝える

3歳か4歳の乳飲み子の時分から田んぼの近くで子守をされ、農作業を手伝うというより田んぼで遊んでいました。いま70歳になり、立場が逆転して田んぼに遊ばれているという感じでしょうか。

農協に勤めながら平成10年に有機農業を始めました。平成15年に定年を迎えて、保育士の仕事を退職した妻と、「環境に優しい農業を通じて安全安心な食べ物を生産する」ことを目標にしました。

「楽しく農業をし、田舎を見て遊び、料理し、おいしくいただき、楽しめる仲間を増やす」、これが行動指針です。食事は人間にとって最も大切なもの。スローフードを通じて食育の大切さを訴え、食卓と生産フィールドを結びつけるアクションを起こそうと決めました。

「身土不二」は人間の体と土地は切り離せない関係にあり、土地でとれた旬のものを食べるのが健康に良いという考え方です。地域の食材や料理方法、地産地消などを学ぶ食育はとても大切です。厚かましくても拒めない程度に次世代に伝えていくのが私たちの年代の義務だと思っています。

有機農業の仲間を増やしたい

例年、1反当り7〜8俵くらいとれるはずが、1/3ほどしかとれない年がいまでもあります。いつまでたっても勉強、研鑽です。同じように苦勞している方の知恵を借りると、励みになります。自分が苦勞したぶん、他の人にも教えないと

## 絵に託して子どもたちに届ける「お米の力」

吉村春子さん

「福井のごはんを食べて強くなろう！」運動を昨年から展開している福井県。意識調査によると、福井の朝食の7割はごはんだという。

「福井県は食育でがんばっているから、全国学力テストで成績上位常連県なんです」と春子さん。朝食に食べた米がブドウ糖になって脳に栄養を補給し、腸を活発に動かす。腹持ちがよく、手軽にエネルギー補給もできる。そんな米の効能や朝食の大切さを、春さんは10枚ほどの紙芝居風のパネルにまとめ、幼稚園生や小学生、お母さん方に説明し、わかりやすいと好評だ。



田んぼの生き物がお米作りにどう関わるか、稲や生き物を色紙で表現したパネルもある。農園を食育の場として開放し、相田集落のサロンの運営を手伝いながら、お米の大切さを伝えることが春子さんのライフワークだ。「草ばっかりのうちの田んぼを見て二の足を踏んでしまい、有機農法に一步踏み出せない人も多いかもかもしれませんが、もっともっと仲間を増やしたいというのが、私のいまのいちばんの願いですね」



「芸術家が描いたんですか」と小学生からファンレターが！

いった心の狭い人が有機農業の仲間にはいません。自分の失敗を別の人が繰り返さないように教えてくれます。私たちの崇拜する人格のできた仲間にも近づきたいという気持ちがあります。自給自足は大事ですが、一匹狼で仙人のように山にこもって何もかも一人で作る時代ではありません。仲間同士それぞれ得意な分野で力を発揮すれば大きな総合力になり、安定した社会が生まれると思います。お互いに安らぎと期待のある有機農業を目指すのにはないかと期待しています。有機農業研究会という組織を作り、仲間が増えます。

